研究

四境戦争から百五十年の今
「弘鴻「種蒔の栞」」に寄せて

会員　山神利勝

はじめにかえて

四境戦争で農・漁業に欠かせない伊勢暦が止められた時、「弘鴻（ひろひろし）」は周防で学んだ倭算・関流算法・暦法星学を生かして、「種蒔の栞」を上表。後、山口明倫館助教授に召しだされ、洋算、蘭学、測量学、国学をも学び、種々の著作を執筆。公職を辞してからは自宅を日文舎と称し、門下生数百人を輩出しました。

徳山地方郷土史研究会誌・紙面を割いていただく前に既報、徳山地方郷土史研究会三十五周年記念誌「「弘鴻」資料調査の始末記」を略記すると、「弘鴻」の事蹟を伝える一次史料は先の大戦（徳山空襲）で焼失。そこで、二次・三次資料から事蹟への道程とその相互関係を求め、「弘鴻」の生涯を焙り出そうとの試みでした。

そもそも、「弘鴻」資料調査の発端は、下松市役所 教育委員会 社会教育課（現生涯学習振興課）H氏から、弘鴻の子孫・H氏とW女史両氏を紹介され、〝「弘鴻」の本を書きたい!!〟為の資料収集。以来、足掛け二年、全・八報に亘る調査報告後も未報情報に接する都度連絡。

月日はめぐり昨年、W女史執筆の素稿。投稿誌に続く自費出版も拝読した上で、激動期を直向に生きた「弘鴻」再び、徳山地方郷土史研究会誌に無理を申した次第です。

「弘鴻」とは!?

「毛利氏八箇国御時代分限帳」に見える弘氏、備後・安芸・周防に六家。また、「萩藩職役人名辞典」に見える弘氏諸家、四十職役に亘り。都濃郡に限れば、延宝八年・都濃代官（花岡）弘仁左衛門。さらには、「防長維新関係者要覧」・「都濃郡誌」・「下松市史 通史編」・他によれば、「弘鴻」都濃郡花岡御番所 監守 八右衛門 嫡子 亀太郎・忠助・一太郎。

後年、花岡御番所 監守から、吉敷郡・厚狭郡測量の年、四境戦争（一八六六年（慶応二）一月 薩長同盟の締結。六月 長州再征）で、農・漁業に欠かせない伊勢暦が止められ、倭算や関流算法、暦法星学を修めていた「弘鴻」は暦を上表。藩は暦を発行すると朝廷に叛くこととなるので、「種蒔の栞」として板行した。後、大坂蔵屋敷での短い職役を経て、山口明倫館助教授に召しだされた。

弘鴻の略歴

「弘鴻の生涯とその事蹟」・「山口学都に於ける教育功労者」・他によれば、

一八二九年（文政一二）亀太郎生まれる 改忠助 改鴻
一八四二年（天保一三）花岡の松本平三郎に倭算を学ぶ
一八四九年（嘉永二）徳山の羽山文哉に関流算法学ぶ
一八五六年（安政三）大道理の田中民之丞に暦法学ぶ
一八六六年（慶応二）吉敷郡、厚狭郡の測量、種蒔の栞
山口明倫館の助教授
一八六七年（慶応三）萩の松本源一に洋算を学ぶ
一八六八年（明治元）山口明倫館の教授
中関の医師吉本寛作に蘭学学ぶ
一八七一年（明治四）英国人ラルキンに測量術を学ぶ
近藤清石、城村五百樹に国学学ぶ
一八七三年（明治六）山口中学校・山口師範学校教授
公職を辞してから、山口後河原に閑居（日文舎）、諸生を教授。
（門下生数百人を輩出）
私立光城女学院・開導教校
「算法小学」

「珠算新式」
「詞の橋立」
「量地必携」
「五十連字解」上記（上津文）
「洋算例題答解」
「歌集阿ら玉」
割円儀割方儀や視経儀を発明
他、未刊六稿本等、多数の著作
一九〇三年（明治三六）山口で死没

「弘鴻」青年期の世相

「月性」・「日本史年表・地図」・他によれば、一八四六年（弘化三）海防の勅諭が幕府に下る。（幕府、外船来航を奏上）長州藩にあっては、各地から請われ、海防僧・月性による海防講筵行脚が伝わる。

一八五四年（安政元）浦家家老秋良敦之助・熊毛郡阿月村
一八五五年（安政二）浦家家老秋良敦之助・熊毛郡阿月村
領主佐世主殿・大津郡黄波戸村
松本村有志・萩松本村
郡代官宍戸九郎兵衛・大津郡瀬戸
領主益田弾正・阿武郡須佐村
益田弾正・萩堀之内
一八五六年（安政三）主催者不詳・萩西田町
一八五八年（安政五）叔父泰成・萩玉江
叔父太敬・萩浜崎町
中谷正亮か!?・山口城下
主催者不詳・熊毛郡田布施村
主催者不詳・熊毛郡平生村
月例法話・大島郡遠崎村

長州藩内は、攘夷派と公武合体派との政争の坩堝と化し、一八六三年（文久三）山口政事堂・外船砲撃・薩英戦争（攘夷論者失脚・七卿都落ち）・奇兵隊の創設等々、風雲急を告げる時。維新前後の激動期を直向に生きた一周南人「弘鴻」の生涯と事蹟は、あまりにも対照的です。

毛利家中興の祖・毛利元就の遺訓

「防長歴史用語辞典」・「福原越後」・他によれば、長州藩主・綱広の命により、「元就以来の旧記」及び幕令を参酌した領内法「万治制法（全二九編）」を制定。

藩主・敬親は、明倫館に文武の師家を集めて〝明倫館は公用に役立つ人材を養成するところである。学校の興廃は人材の質にかかっていて、人員の量ではない。諸士が養育の子をして明倫館に学ばせるのは自由であるが、その場合、才器能力のあることが条件で、身分の貴賤を問わない。いろいろ言いわけをつけて、名利のために凡器を養うことをここでは許されない〟と訓示しています。

「毛利元就」〝はじめに〟書きによれば、〝・・・毛利氏関係史料は、全国的にみて他の戦国大名に比べて質量とも桁ちがいに飛び抜けて豊富である。そして特徴的なことは、たとえば、『大日本古文書 毛利家文書』にみられるように、そのなかにある元就書状の存在である。その書状のうちにも、右筆に書かせて元就が花押をすえたいわば右筆書状もあるが、相当数の元就自筆書状がみられる。この自筆書状の多さもまた比類がない。・・・〟

あとがきにかえて

〝四境戦争から百五十年の今「弘鴻「種蒔の栞」」に寄せて〟と題したのは、W女史が日本児童文学二〇一五年九・一〇月号「これは「種蒔の栞」」を投稿。続いて、「これは「種蒔の栞」周防の和算家弘鴻（ひろひろし）の話」を自費出版（県内公立図書館に寄贈）されたので、徳山地方郷土史研究会三十五周年記念号の「「弘鴻」資料調査の始末記」追補・改訂版の筆を取りました。

徳山に生まれ疎開・転入した烏帽子岳（412m）裾野の里にて記す

主な参考引用文献・資料

東京帝國大学史料編纂掛「大日本古文書 毛利家文書」

山口県文書館編「萩藩閥閲録」

時山弥八著「もりのしげり」

渡辺翁記念文化協会「福原家文書」

執筆・上田芳江 監修・三坂圭治「福原越後」
石川卓美著「防長歴史用語辞典」
弘美知生著「弘鴻の生涯とその事蹟」
田村哲夫編「防長維新関係者要覧」
教育関係者懇話会叢書No.16「山口学都に於ける教育功労者」
岸田裕之著「毛利元就」
海原徹著「月性」
河村蒸一郎著「下松市史異説」
牛見真博著「長州藩教育の源流」
児玉幸多編「日本史年表・地図」
和木浩子著「これは「種蒔の栞」周防の和算家 弘鴻(ひろひろし)の話」